

ハリケーン関連情報 (2016年ハリケーン・シーズン)

【米国気象当局による予想の要点】

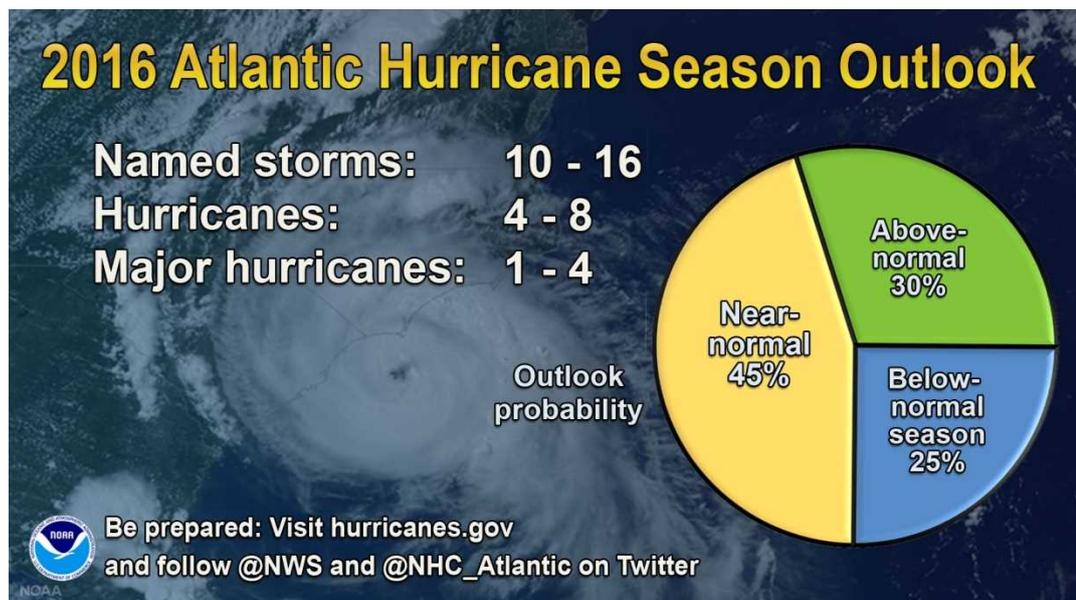
- 「**平年並み**」
 - ・「**平年以下**」となった過去3年間に比較すると、ハリケーンの活動が**活発化**
 - ・不確定要素が多く、今期は予想が特に困難（予想確率45%）
- **ハリケーン等の予想数**（予想確率70%）
 - ・命名される熱帯暴風雨（風速39mph以上）：10～16個
 - ・うちハリケーン化（風速74mph以上）：4～8個
 - ・うち重大ハリケーン化（カテゴリー3～5（風速111mph以上））：1～4個
- シーズンがピークを迎える前の8月初めに最新の予想を発表

1. 米国海洋大気庁気候予測センターの予想

5月27日、米国海洋大気庁（NOAA, National Oceanic and Atmospheric Administration）の気候予測センター（CPC, Climate Prediction Center）は、6月1日から11月30日までの2016年ハリケーン・シーズンに関して、

- 今期中、命名される熱帯暴風雨（風速が時速39マイル以上）が10～16個（うち4～8個がハリケーン（風速が時速74マイル以上）化（カテゴリー3～5の重大ハリケーン（風速が時速111マイル以上）1～4個を含む。）発生する予想確率は70%。
- 「平年並み」を予想しているが、熱帯暴風雨の成長に係る気候条件の不確定要素が多く、今期は予想が特に困難。「平年並み」となる可能性は45%、「平年以上」となる可能性は30%、「平年以下」となる可能性は25%。
- 「平年以下」となった過去3年間に比較すると、ハリケーンの活動が活発になる。

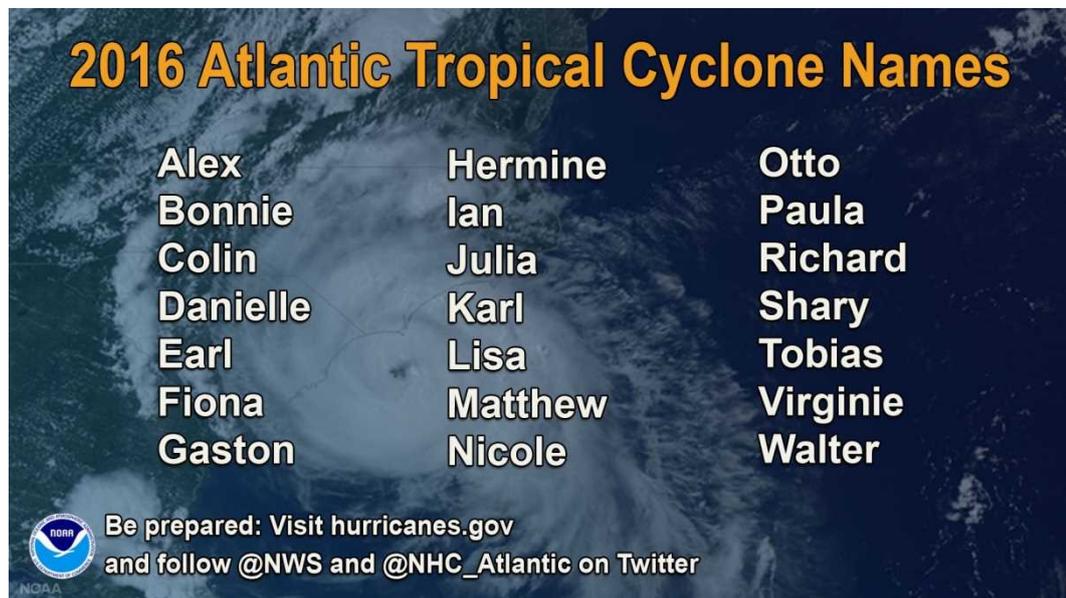
との予想を発表するとともに、ハリケーン・シーズンがピークを迎える前の8月初めに最新の予想を発表する予定であることについても発表しました。



※出典：NOAA, "2016 Atlantic Hurricane Season Outlook"

2. 2016年ハリケーン・シーズンにおける命名

また、同庁は、2016年ハリケーン・シーズンにおける熱帯暴風雨に係る命名について、以下のとおり発表しました。



※出典：NOAA, “2016 Atlantic hurricane season tropical cyclone names”

3. ハリケーンに関連する気象現象

同庁は、ハリケーンに関連して、

- 大西洋でのハリケーンの高活性期と低活性期は、一般的に25年から40年周期であるところ、1995年以降継続している高活性期が終了したか否かについては不明確な状況。こうしたハリケーンの高活性期は、高い大西洋海面水温と強い西アフリカのモンスーンに特徴付けられる大西洋数十年規模振動（AMO, Atlantic Multi-Decadal Oscillation）の温暖期と呼ばれる海面水温のパターンと関係しているが、過去3年間の低調なハリケーンシーズンは、AMOの寒冷期への移行を伴うものであり、これが短期間にとどまらなければ、ハリケーンの高活性期につながることであり、既にかかる時期が開始している可能性もあり。
- エルニーニョ現象は消失しつつあり、NOAAとしては、ハリケーンの高活性期をもたらすラニーニャ現象が発生する確率は70%と予想しているところ、ハリケーン・シーズンのピークとなる8～10月に判明するとみられているが、現時点での予想モデルでは、ラニーニャ現象の強さやその影響については不確定的。

と発表しました。

4. 米国連邦緊急事態管理庁からのコメント

これに関連して、米国連邦緊急事態管理庁(FEMA, Federal Emergency Management Agency)の幹部は、

- 毎年、ハリケーン・シーズンの予想は、活発であったり低調であったりと変化するものであるが、たった一つの暴風雨で人生が大きく混乱してしまう。
- 最悪の事態への備えこそが、自分や家族、緊急対応要員を危険から守ることにつながる。今日からでも少しずつ準備を始めること。家族同士の連絡方法、家庭での非常用資機材の準備、家族での緊急避難路の確認といった小さな準備の積み重ねこそが、被災時に自らの命を守るのである。

とのコメントを発表しました。